



霞ヶ浦北浦の水温も高い

今年の夏は大変な暑さで、最高気温が30℃を越える日が連日続いています。

霞ヶ浦北浦の水温は気温と密接な関係にありますので、気温が高いと湖水も暖められて水温も高くなります。

右の図は、平成2年から今年8月までの、内水試棧橋における午前9時の月平均水温（表面）の推移について示したものです。（ただし、今年8月については19日までの平均値です。）

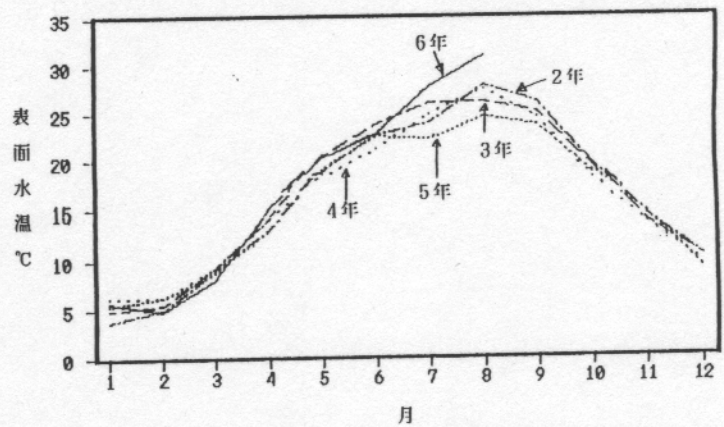
これによると7～8月に、変動が大きくなっています。

特に目立っているのが昨年と今年で、7月の昨年の平均水温は22.2℃、今年は27.8℃、8月の昨年の平均水温は24.6℃、今年は31.0℃（ただし、19日までの平均値）と昨年に比べると、7月で5.6℃、8月では6.4℃も高くなっています。

ちなみに平成2年～4年が平年並みとすると、7月は24.6℃、8月では26.8℃となっています。

7月下旬から湖の表面水温は、毎日30℃以上となっていますが、この夏は南よりの風が多く吹いているためか、湖水温の上下差があまりみられません。

このため表層も底層も一樣に水温が高い状態にあります。



(6年の8月は18日までの平均値)

月平均水温の推移 (内水試棧橋午前9時測定)

今年の夏はアオコが大発生した昭和48年の気候と、良く似ているともいわれています。

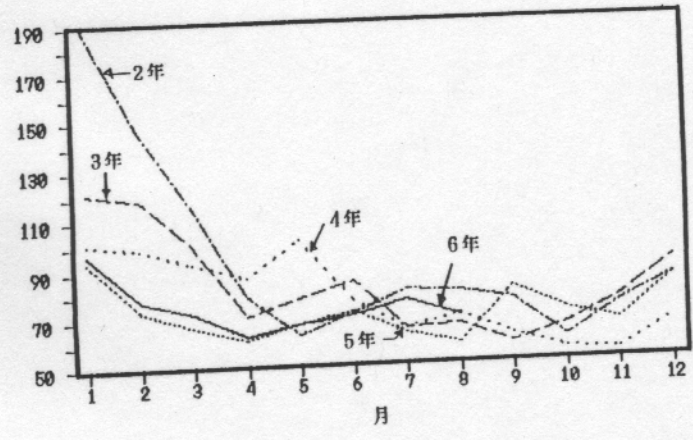
そこでプランクトンの発生量の指標に利用できる、透明度について調べてみました。

左の図は、平成2年から今年8月までの、内水試棧橋における月平均透明度の推移について示したものです。（ただし、今年8月については19日までの平均値です。）

年によってかなりのバラツキがみられますが、今年の7～8月の透明度の値は、他の年に比べて特に低い（プランクトン発生量が多い）ということではなく、むしろ昨年より幾分高くなっているようです。

現在、アオコは土浦入りに僅かにみられる程度で、昭和50年代のような発生状況ではありません。

今年のように水温が高く、日照時間が多いにもかかわらず、アオコの発生量が少ないことから、昭和63年頃からみられているアオコ発生量の減少は、気象条件によって起こっているものではないといえそうです。



(6年の8月は18日までの平均値)

月平均透明度の推移 (内水試棧橋測定)